

# 中川久定『啓蒙の世紀の光のもとで ——デイドロと『百科全書』——』

岩波書店、1994年、viii+475ページ

森村敏己（一橋大学）

本書は、著者が三〇年に及ぶ期間に様々な場で発表してきた一二本の論文からなる論文集である。冒頭に置かれた「デイドロの〈現代性〉」はいわば導入部に当たり、以下の論文のうち、固有のデイドロ研究とでもいうべき六本がⅠとして、デイドロを中心としながらも広く『百科全書』あるいは啓蒙思想全般を扱う五本がⅡに分類されている。限られた紙数ですべての論文に言及しても、かえって散漫な印象しか与えまい。このため書評者の関心を基準とした選択をせざるをえないことを予め断っておく。

まず「デイドロの〈現代性〉」において著者は、『ダランベールの夢』を題材にしてそこに読み取れるデイドロの思想の多義性、豊かさを示したうえで、現在においてなおわれわれを引き付けてやまないデイドロの魅力について語る。著者はその根源を「抑圧されたもの」を復権しようとする彼の姿勢に求めている。啓蒙思想が旧来の価値や秩序を破壊し、それに代わる秩序の確立を目指したとしても、こうして成立した新たな秩序自体、それが正統性を自称する限り、非正統的なものの抑圧・排除を伴わざるを得ない。著者は中心と周辺、正常と異常という二項対立によってこの抑圧を説明しながら、一貫して被抑圧者の復権を試み、既存の価値や秩序の転倒の可能性を洞察していた点にデイドロの〈現代性〉を見る。そしてこの「転倒」を可能にしたのは不当に抑圧されたものに対する彼の「共感」であり、この能力こそデイドロが理想とし続けた高い倫理性を支えているとされる。

価値の転倒可能性を追及するデイドロの姿勢は小説においても発揮されている。「哲学者たちの小説」では、モンテスキュー、ヴォルテールとの比較という形でデイドロの小説が論じられているが、ここでも著者が指摘するのは、前二者の作品を貫く不変の秩序への信頼とは対照的なデイドロの姿勢である。『ラモーの甥』、『宿命論者ジャックとその主人』といった彼の小説の中では、登場人物のみならず作者自身の視点までもが絶えず反対者によって揺さぶられ、問い直され、乗り越えられるのであり、ここに描かれているのは「社会と宇宙における人間の宿命自体」であるとされる。

さらに「価値の転倒」という視点からふたつの論文の内容を紹介しておこう。「史実からユートピアへ」において著者は『ブーガンヴィル航海記補遺』を、デイドロにこの作品を書かせる契機となったブーガンヴィルの『世界周航記』およびこの作品に対するデイドロの書評と比較することで、デイドロの創作文意図やその方法を解明している。著者は『補遺』の主題が『周航記』の全体ではなくタヒチに関する記述のみに関わることを示し、ふたつの作品を並べて引用することでデイドロの問題意識を浮き彫りにしていく。すなわち、事実を客観的に記述しようとしながらも、国王の名のもとにタヒチの領有を宣言することに何の疑念も抱かない海軍将校ブーガンヴィルに対して、デイドロは明確に侵略されたタヒチ島民の立場に立つことで、ヨーロッパの植民地拡張政策を批判する。さらに彼はブーガンヴィルが記した事実をもとにタヒチの生活を「自然」という原理に沿ったものとして理想化し、これにヨーロッパの反「自然的」文明を対置し、批判するのである。ここでもブーガンヴィルに代表されるヨーロッパ人が疑うことのなかった価値——白人の優位、一夫一妻、僧侶の独身など——はタヒチの「自然」によってその正統性を剥奪されている。

「一八世紀フランス『百科全書』の日本観」では『百科全書』に収録された六五項目の日本関連

記事が分析されるが、著者はジョクール執筆の「日本」と並んで、デイドロの手になる「日本人（の哲学）」を日本論総論と位置付け、デイドロの意図が「ヨーロッパの政治的・宗教的現実に対する批判」であったことを明らかにする。つまり、彼が日本について指摘する偶像崇拜と迷信、理性的な哲学者を悩ます僧侶の蒙昧主義、宗教的教儀の愚かさ、迷信と専制の協力関係などはすべてヨーロッパ自身にはねかえってくる問題なのである。日本論各論とされるその他の項目についても事情は変わらない。編集者デイドロの狙いは日本に関する正確な「事実」の記録と伝達という枠を越え、日本という鏡によって「ヨーロッパ世界の栄光と悲惨」を照らし出すことに向けられている。そこでは「先進ヨーロッパ文明」対「野蛮な日本」という単純な二項対立は完全に転倒されている。

他にも『ダランベールの夢』の主題が唯物論的自然論を越えて、死の恐怖の克服さらには後世の記憶の中で不朽の位置を獲得したいというデイドロ自身の願望にまで及んでいることを示した『『ダランベールの夢』三部作の言外の主題』は常にテキストの深層を読み取ろうとする著者の姿勢をよく表わしており興味深い。しかしそれ以上に興味深いのは、本書全体を通じて描かれるデイドロその人であろう。